自由な創造の場を求めて

竹　内　　豊

今日ほど，美術が混沌として見られる時代は，かつてなかったのではないでしょうか。また今日ほどあらゆる様式が，無抵抗に受け入れられ消化（消却）されてしまう時代は，かつてなかったのではないでしょうか。現代の美術は，いま大きく展開しつつあり，混沌と苦悩の色は，われわれの周囲にも，激しく渦巻いています。この激しい変貌の時期にあって，われわれはいかに在るべきなのでしょうか。

現代の芸術は，作家の独自な，優れた感受性がもたらす独自な世界，すなわち個性が求められているのですが，それは個性を基盤として一つの新しい世界を創るということなのであって，美術は目に見えるものを再現するのではなく，目に見えないもの，作家の目（心）を通してしか見えないものを発見するものなのです。したがって具象的作品であっても，作家独自の感受性を通して表現された，日常われわれが接している自然物とはおのづから違うものなのです。

作家の自由な思考による，自由な表現からは，必然的に，新しい様式が生まれてくるわけで，芸術は新しい発見によって，絶えず変化しながら，そこに新しい発展があるわけです。一とところに停滞するということは許されないのではないかと思います。

美は主観の所産であるから，美術には，元来，価値基準というものがなく，それは個人，あるいは時代によって拡大され，あるいは縮少されて評価されるものであり，様式の新旧が，作品の価値を左右するものでないことは，いうまでもありません。具象であれ，抽象であれ，その表現様式を問わず作品の価値は，作家の個性にうらずけられた新鮮な発言があるか，ないかによるものではないでしょうか。優れた作品には緊張感，充実感が漲り，しかも一種の解放感が交錯して，大きな拡がりを示すものではないでしょうか。創造的作品に接するとき，抵抗感が放つある緊張感を感ずるものですが，それは作家の張りつめた自由の意志による充実した精神が，そこに息づいているからです。それは個性を基盤として生み出された世界，小宇宙が，われわれの心を吸引し，包容してしまうからなのです。われわれの心を解放し，そして充足させてくれる大きな感動となって，われわれに伝ってくるのです。

造形美術は多くの場合，無意識のうちに模倣から始まり，自然の，あるいは尊敬する先輩作家，同僚の影響を受けながら，発展してゆくものですが，しかし，単にそれだけにとどまるならば，作品（作家）としての存在価値は稀薄であって，作家は互に影響されながらも，作家独自の世界を創り出してゆかねばならないのです。その過程は，絶えず出来上った作品に対する懐疑，不安，常に乗り越えねばならない壁が立ちはだかつて，それとの対決がなされなければならないのです。徒らに，安易な技の修練にのみ，日々を費してはおれないのであって，絶えず，肯定と，否定・破壊が繰返されつつ，描き続けられなければならないのです。造上げた自己を，破壊，否定して，明日の発展を遂げなければならないのです。過去の自分を無限に押しのけ，無限に自分から脱出して，より高めてゆかねばならないことなのです。

いかに自分自身が，変化したと思われても，他からの，巨きな視野から見れば，それは微々たる変化であって，いかに表現様式が変ろうとも，その作家の持味，滓のようなものは，出てくるものであり，作品の底から滲み出て作品を覆っているものが，その作家の思想であり個性なのでしょう。

自分自身を静かに見つめることは，作家にとって大切なことであるということはいうまでもありませんが，自分の個性は，こういうものであると，最初から，自分の頭に画いてしまうこと，頭から規制してしまうこと，その中でのみ行動することは，自ら，自分に枠を嵌めてしまう危険なことではないでしょうか。作家は，自己の限界を見きわめることより，自己の限界を打ち破ってゆく勇気が必要なのです。作家は，自己の限界を絶えず乗り越えて，生きてゆくものなのではないでしょうか。

自由な創造に立向ってゆくということは，ある意味で，広く社会に迎合されないことかも知れませんし，ある意味で，社会から疎遠されてゆくことかもしれません。しかし創造するものは，常に，自由であらねばならないし自由えの斗いの中で，真に自分が自分を自由にできたもののみが，真の自分にめぐり逢うことのできるものなのです。

作家とは，絶えず何事かを求め，不断に感じ，思い悩み，心のやすらぎのないものかもしれません。時として今日も，明日も，描き続けてゆかぬばならない自己の宿命を嘆くこともあろうかと思います。しかし，創造することの悦び，始めて宇宙の中に，本当の自分にめぐり逢うことのできる悦び，それは素晴らしく幸福なことです，が，同時に不幸なことなのかもしれません。それは，真に創造し得る人間のみが知る，悦びであり，悲しみなのです。

われわれは，今日の創造に生命をかけているのです。そして明日は，その限界を乗り越えてゆかねばならないのです。それは限りなき自己との斗いなのです。

全道展は，作家（作品）の質のみがすべてである展覧会として，現代に生きる作家が互に自己をたしかめあう場なのです。